

二宮安徳 略歴

- 1904 (M37) 岐阜県郡上郡八幡町(現郡上市)に生まれる
- 1924 (T13) 岐阜市立岐阜商業学校卒業
- 1926 (T15) 岐阜県郡上郡相生尋常高等小学校奉職
- 1939 (S14) 岐阜市立岐阜商業学校教諭
- 1944 (S19) 岐阜県武儀郡美濃町青年学校長
- 1946 (S21) 岐阜県視学
- 1947 (S22) 岐阜県武儀地方事務所長
- 1951 (S26) 岐阜県衛生部医務課長、岐阜県立大学医学部事務局長
- 1953 (S28) 岐阜県土岐地方事務所長として瑞浪市、土岐市誕生に貢献
- 1955 (S30) 土岐市制始まる、市長就任
- 1973 (S48) 二宮コレクションを市に寄贈
- 1975 (S50) 5期務めた市長を退任
勲三等瑞宝章受章、岐阜県土岐市名誉市民
- 1986 (S61) 逝去(享年81)



二宮コレクション 初代土岐市長

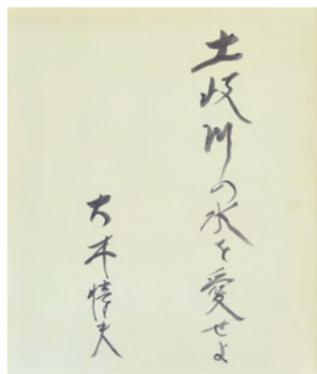
二宮安徳が描いた夢

初代土岐市長に就任した二宮のもとには何千通もの祝電が寄せられました。中でも二宮の心を捉えたのが、尊敬する師である藤村耕一から贈られたこの言葉です。清冽な長良川に育った二宮に、白濁した土岐川をも愛する心を持つよう諭したこの言葉を胸に二宮は市政を執り行いました。一回りの年齢差があった二人ですが、互いを尊び生涯を通じた交友を持ちました。藤村の広い交友関係は二宮にもその片鱗が垣間見えます。

土岐川の水を愛せよ

《土岐川の水を愛せよ》
藤村耕一(筆・大木惇夫)
本作は詩壇の大家である大木惇夫の筆により藤村の言葉が色紙に書かれたもの。大木惇夫と交友のあった藤村がこれを用意し二宮に贈ったと考えられる。

○藤村耕一(ふじむらこういち) (1892-1976) 岐阜県武儀郡出身。教職を務めた後、上京し宝文館に入社。編集者として「令女界」「若草」などに携わる。自ら出版社を立ち上げるも空襲で焼失。戦後は自宅を岐阜県に縁を持つ者の寄合場とし多くの人が集った。



多くの課題を乗り越え土岐市誕生
昭和28(1953)年、町村合併促進法の施行を目前に、東濃地域でも町村合併の話が本格的に動き出しました。各町村の財政状況や地域住民からあがる懸念、要望など多くの課題を抱える中、連日連夜にわたる

を務めていた二宮安徳です。二宮は2年に及ぶ議論を通して地域住民との信頼関係を築き、周囲に強く推されて市長選に出馬、初代土岐市長に就任しました。ここから5期、20年のあいだ二宮は市長として走り続ける事になります。40点を超える「二宮コレクション」はこの20年間の様々な人との交流から成るものです。

議論の末、昭和30年に8町村が合併し土岐市が誕生しました。このとき、地域住民と根気強く対話を重ね話し合いをまとめたのが、当時、土岐地方事務所所長の

前向きな姿勢で夢がなくてはならない土岐市陶磁器試験場の設立
市長就任から間もなく、二宮は市が誇る陶磁器産業の行く末を見据えて「試験機関をもないようでは産業は伸びない」とし、市独自の陶磁器試験場の設立に着手、昭和33(1958)年に完成しました。初代市長には、先んじて下石で私設の陶磁器研究所を設立し市試験場の準備委員を務めた安藤知山が着任。顧問には東京藝術大学教授の加藤土師萌、陶磁器デザイナーの日根野作三らが名を連ねました。



土岐市陶磁器試験場(「知山抄」1978より転載)

「始末、前向きな姿勢で夢がなくてはならない」とし、革新的な技術やデザインなどを積極的に開発し、近代生活にマッチするものづくりの一助となることを望みました。



《花器》安藤知山



《赤楽茶碗》日根野作三

文化不毛の地であってはならない 文化芸術に親しむ心の醸成を願って



左から小山富士夫、濱田庄司、二宮安徳 昭和42(1967)年出光美術館にて

産業、歴史、文化、様々な視点から当地のやきものに思いを馳せてきた二宮は、陶芸家たちが住まい制作活動を行う拠点「美濃陶芸村」構想の実現に向け、昭和46(1971)年に入村者を募集しました。翌年、二宮の要請に応えて古陶磁研究家陶芸家の小山富士夫が陶芸村に花ノ木窯を築窯、さらに翌年、鎌倉から居を移し晩年を過ごしました。小山と二宮の出会いには二宮の市長就任以降とみられますが、小山自身は早くから美濃に関心を示し、昭和初期には古窯調査で美濃を訪れています。昭和42年に国史跡となった元屋敷陶器窯跡の出土品についてもその史料価値を説き、分散させぬよう訴えました。全国、世界各地の窯場を踏査した小山が生活と制作の拠点として最後に美濃の地を選んだ背景には、窯業地としての歴史的魅力と、それらの価値を理解し未来へつなげようとした二宮の思想への共鳴があったのではないのでしょうか。



《種子島茶碗》 小山富士夫



《向付》



《白瓷水鳥文皿》

塚本快示

昭和48(1973)年、市長退任を2年後に控えた二宮は、土岐市への恩返しとして、長年にわたり蒐集したコレクションの一切を市に寄贈しました。同年、これらのコレクションを展示するための土岐市記念館がオープンし市民に開放されました。このとき二宮は「私の真の念願は将来県下に誇る博物館の建設である——文化不毛の地であってはならない」と話し、二宮コレクションや当地の歴史を物語る窯跡の出土品など市の財産を広く公開し、文化芸術に親しむ心を醸成し継承していくことへの願いを未来に託しました。

《雪月花》
加藤土師萌、加藤栄三、加藤東一

昭和48(1973)年、市長退任を2年後に控えた二宮は、土岐市への恩返しとして、長年にわたり蒐集したコレクションの一切を市に寄贈しました。同年、これらのコレクションを展示するための土岐市記念館がオープンし市民に開放されました。このとき二宮は「私の真の念願は将来県下に誇る博物館の建設である——文化不毛の地であってはならない」と話し、二宮コレクションや当地の歴史を物語る窯跡の出土品など市の財産を広く公開し、文化芸術に親しむ心を醸成し継承していくことへの願いを未来に託しました。



土岐市記念館開館 昭和48(1973)年 テープカット中央が二宮安徳 標札は海音寺潮五郎が揮毫

私の真の念願は将来県下に誇る博物館の建設である——文化不毛の地であってはならない 私の貧しい一灯がせめてもこの機運を醸すきっかけとなつたらと念じている 『市長の手帖』より抜粋

編集：(公財)土岐市文化振興事業団 鍋内愛美

土岐市美濃陶磁歴史館 土岐市泉町久尻 1263 TEL.0572-55-1245
開館時間：午前10時～午後4時30分(入館は午後4時まで)
休館日：月曜日、祝日の翌日
入館料：一般200円(150円)、大学生100(70円)、高校生以下無料
※()内は20名以上の団体料金
障がい者手帳をお持ちの方と介助者1名 一般100円、大学生50円

次回展示 土岐市の文化財展「祭りと信仰」
【会期】2020年12月4日(金)～2021年2月23日(火)
【会場】土岐市美濃陶磁歴史館 第1展示室
※同時開催「美濃焼1300年—美濃桃山陶を中心として—」(第2展示室)



右から二宮安徳、濱田庄司、佐久間藤太郎
昭和42（1967）年

産

業、教育、福祉など多方面にわたって市民生活の底上げと市政の基盤づくりに取り組むかたわらで、二宮は文化芸術にも強い関心の眼を向けました。当然、やきものへの関心は高く、全国の窯業地を伝統産業の両側面から見つめました。中でも益子（栃木県）との縁は深く、昭和32（1957）年頃には、益子で製陶業を営み陶芸家でもあった佐久間藤太郎との交流が始まっています。二宮は佐久間を「清淡にして純朴な人柄と評し、氏との関係を「百年の知己の如く」と表しました。佐久間との交流を機に、益子に拠点を置

百年の知己の如く 民藝運動の作家たちとの交流

いていた陶芸家濱田庄司との交流も始まったとみられ、昭和41（1966）年には佐久間と濱田が連れ立って土岐市を訪れています。翌年は二宮が益子を訪れ、両氏の邸宅や工房、濱田が蒐集した世界各国の品々を見聞しました。以降も両氏との交流は途切れることなく、両氏が土岐市を訪れ作品の展示会や講演会が開かれれば、荒川豊蔵が顔を出したり、また、二人が豊蔵の工房を訪ねたりすることもありました。これらの交流の中で濱田は東濃の陶芸を志す面々の情熱に感じ入り、二宮が掲げる陶芸村構想に耳を傾けるなど、事あるごとに土岐市に関心の眼を向けていたことがうかがえます。

昭和40年代に集中した濱田との交流は、二宮にとつてさらなる交流の輪を広げることとなります。民藝運動を牽引した板画家の棟方志功、そして、イギリスのセント・アイヴスに工房を持つ陶芸家バーナード・リーチとの出会いも濱田を介して得られたものと考えられます。二宮コレクションには棟方作の板画（版画）、倭画（肉筆画）、墨書が、また、リーチ作の陶磁器作品と絵画が含まれ、作家たちの多様な側面を捉えています。出会いが出会いを呼びその交友を重んじた二宮は、芸術の深みとそれらを生み出す作家たちの人柄や情熱に大きな親愛と尊敬の念を抱いていたといえるでしょう。

○板画（はんが）・倭画（やまとが）…版画、肉筆画に対し棟方が独自に定めた呼称。

棟方志功

（右）《鷹の図》
（左）《閑徹》



濱田庄司



《黒釉錆流描皿》

《鐵砂柿絵角瓶》



佐久間藤太郎



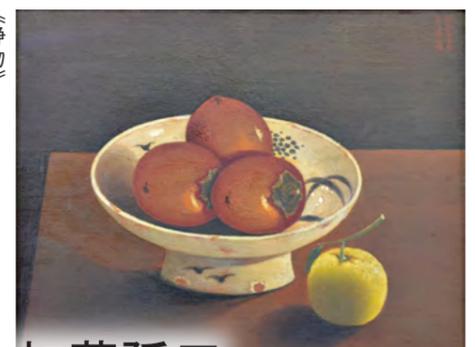
《白磁花器》

バーナード・リーチ

《壺の図》

人に会うことはすべて学ぶこと 書画への関心

400点を超える二宮コレクションは、そのうちおよそ140点が絵画や墨書で構成され、二宮の関心の眼が陶磁器にとどまることなく大きく見開かれていたことがうかがえます。加藤延三や村上肥出夫といった土岐市出身の画家、坪内節太郎や田中比左良、坂井範一といった岐阜県を代表する画家など、二宮自身の縁ある地を由来に持つ作家たちの作品が目立ちます。おそらくその中には、藤村耕一を介して出会った作家も少なからずいたことでしょう。「人に会うことはすべて学ぶこと」との思いとともに、多くの作家たちと出会い、交友を持ちました。



加藤延三

《静物》
○加藤延三（かとうのぶぞう）（1891-1970）岐阜県土岐郡駄知町生まれ。画家、美濃の岸田劉生と呼ばれる。昭和35（1960）年、延三の後援会が発足。二宮が後援会長となる。

村上肥出夫



《ガールドノード》
○村上肥出夫（むらかみひでむ）（1933-2018）岐阜県土岐郡肥田町生まれ。画家。20歳のとき画家を志して上京、日雇いの仕事をしながら絵を描き、下宿生活と路上生活を繰り返す。昭和36（1961）年、銀座の路上で作品を売っていたところを彫刻家本郷新に見出され生活は一転。援助を受けながら制作に没頭し、翌年に一時渡仏。昭和39年の個展で「放浪の天才画家」とマスコミの注目を浴び、一躍画壇の寵児となる。このときに二宮は村上の存在を知ったと考えられる。

海音寺潮五郎

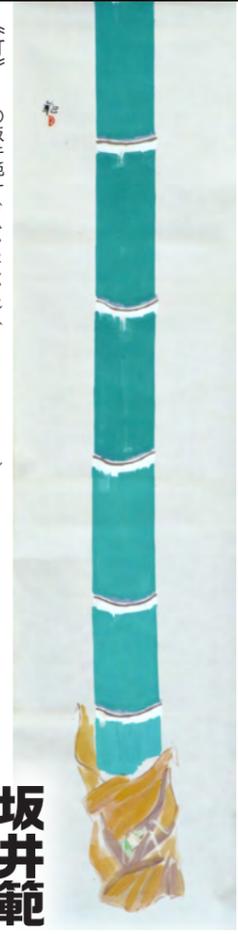


土岐市にて 二宮安徳（右）と海音寺潮五郎（左）



《踊子の図》
○田中比左良（たなかひさよし）（1890-1974）岐阜県可児郡御嵩町生まれ。漫画家、挿絵画家。

田中比左良



《竹》
○坂井範一（さかいはんいち）（1899-1998）岐阜県加茂郡蜂屋村生まれ。画家。

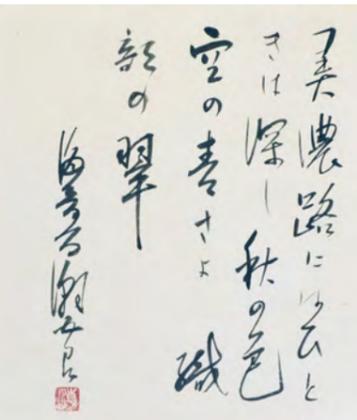
坂井範一

坪内節太郎



《狸々図》
○坪内節太郎（つばうちせつたろう）（1905-1979）岐阜県稲葉郡加村生まれ。画家。

《美濃路の秋》



美濃路にはひときは深し秋の色、空の青さよ織部の翠
○海音寺潮五郎（かいおんじちようごろう）（1901-1977）鹿児島県伊佐郡大口村生まれ。小説家。「天正女合戦」で直木賞を受賞、「平将門」「天と地と」など数々の名作を残す。
海音寺は東京の藤村耕一宅に出入りしていたことから、二宮とは藤村を介して知り合ったと考えられる。昭和42（1967）年、陶磁器を題材とした作品を書きたいことから土岐市を訪れ、以降も親交を深める。